
幽遊白書NEXT

ソフィア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽遊白書NEXT

【Nコード】

N42850

【作者名】

ソフィア

【あらすじ】

幽遊白書の続編

海ではしゃいでいた。

あの頃から一年

幽助の最後の闘いがはじまる

第一章 久しぶりの再会

蛭子「幽助。」

幽助「ただいま」

魔界統一トーナメントが終わり

人間界に帰還した

浦飯幽助は、蛭子や、桑原、ばたん達と皆で海ではしゃいでいた。

それから、1年。何事もなく平和な日々が続いた

高校2年生になった

幽助のもとに

久しぶりの

ばたん登場

ばたん「幽助。大変だよ。霊界が。」

ぼたんの話によると。

地獄に落ちた

妖怪達を、連れ出した

妖怪がいると言う

罪を償っていた

乱童、朱雀をはじめ、悪名高い妖怪を連れ出して行ったという。

霊界特防隊は、全滅し

コエンマも深手を負った

辛うじて人間界に降りた

ぼたんは、幽助に助けを求めにきたのだった

幽助「久しぶりに、暴れてやるか」

幽助が携帯を取出し、桑原に連絡して
ことの何振りを説明すると桑原は
蔵馬に連絡を取った

そして3人は、合流した

蔵馬「久しぶりの再会がまた、事件なんてね」

桑原「この桑原様さえ居れば、乱童や朱雀なんて、ちょちょいと片付けてやるよ。」

ぼたん「とりあえずコエンマ様の映像を」

霊界テレビにより

コエンマと通信することができた

コエンマの話によると、
連れ出した妖怪は、魔界の奥深き、魔界にある。冥界に住む、最強
クラスの妖怪、冥界獣と呼ばれる妖怪

その名は、冥界の支配者、冥王 ダビデ

魔界の低級妖怪を主に食し、S級妖怪が大好物

今は、なき幽助の父

雷禅が、全盛期の頃、冬眠させたのだが、

雷禅が死去し、数年達

術が溶けて復活してしまったのだ。

冥王 ダビデは、SSS級妖怪と言える

全盛期の雷禅もSSS級と呼べる力を持っていた。

幽助「親父、今度は、俺が潰してやるよ。ダビデを」

こうして、幽助達は、魔界に向かうことにした

第二章 魔界へ

幽助達は、まず霊界へ

そして、傷ついた
コエンマがいた。

コエンマが冥界には、おそらく、ダビデは、いないと言った。

魔界の低級妖怪や、S級妖怪を食するため
暴れていると言う

特防隊の瀕死状態の4人がなんとか
魔界の穴を広げた。

そして3人は、魔界に行った

コエンマ「頼んだぞ幽助」

ぼたん「幽助、、」

魔界に降りた3人は、驚いた

荒野は、荒れ果て、
原型を止めてしまった。

幽助「にしても、妖怪がすくねえ。」

蔵馬「おそらく、ダビデが食ってしまったんだろう」

その時、雷が落ちてきた。

そう、この雷は、四聖獣のリーダー朱雀

朱雀「久しぶりだな、浦飯幽助」

白虎「ははっ、リーゼント久しぶりだな」

そこには、玄武、白虎、青龍、朱雀がいた。

蔵馬「地獄から抜け出したか。」

桑原「けっ、雑魚のお出ましか。」

白虎は、桑原に

玄武は、蔵馬に

朱雀は、幽助に

青龍も幽助に襲い掛かろうとした瞬間

飛影「貴様の相手は俺だ」

飛影が現れた。

瞬く間に青龍を切り裂いた

青龍「ま、またしてもぐわぁー」

飛影「雑魚め」

蔵馬「お久しぶりですね」

桑原「よぉー飛影」

幽助「元気か??」

飛影「とりあえず雑魚を片付けるバカ。」

幽助「わぁーってるよ」

幽助も一撃で朱雀を

桑原も次元刀で吸収しきれないほど、白虎をバラバラにした

蔵馬は、一瞬で、玄武の核を破壊した。

幽助「こんなに弱かったけこいつら。」

飛影「ふん。貴様らが強くなったそれだけだ」

桑原「このチビ相変わらず生意気だな」

そして次々に懐かしの妖怪が現れた

幽助「なんだなんだ」

ゼル、ガマ、呂斗、黒桃太郎に、魔金太郎など

雑魚妖怪が現れた

当然、今の幽助達にかなうはずもなく撃破

そしてついに

幽助「な、なんだこのとんでもねえ、驚でかい妖気は、」

蔵馬「あっちだ」

桑原「な、なんだと」

幽助「戸愚呂!!」

そう、ダビデに今まさに、食われかけているのは

戸愚呂（弟）であつた

幽助「てめえ、くらいやがれ霊丸!!」

第三章 冥王 ダビデあらわる

幽助は、ダビデに向かい
霊丸を放った

ダビデ「はぁーっ」

なんと気合いだけで
幽助の大砲みたいな霊丸を
かき消したのだ

ダビデ「食事の邪魔をするな。」

幽助「戸愚呂、大丈夫か」

戸愚呂「浦飯、久しぶりだな。また一段と腕を上げたようだね。が
はっ」

幽助「戸愚呂もう喋るな。お前程の奴が何故」

戸愚呂「簡単さ、奴は俺を遥かに凌ぐ強さを持っているただそれだ
けさ」

幽助「蔵馬、なんか薬草はねえか。」

蔵馬「ああ」

戸愚呂「いいんだ。浦飯、幻界は、元気か。久しぶりにお前と会え
てよかったよ、、また、いつか、会えたら、そのときは、闘いた
い、、、、」

戸愚呂は、息耐えた

幽助「戸愚呂!!」

桑原「戸愚呂がまさか。」

ダビデ「そんな低級妖怪ほっとけよ。おっ、その2人つまそうだ、この戸愚呂より遥かに高い妖気S級以上かな」

飛影「御託は、それだけか」

蔵馬「いくぞ」

飛影、蔵馬は、ダビデに向かっていった

ダビデ「ふん。その程度か」

蔵馬「このままでは、絶対勝てない。変身するしかないな」

飛影「邪王炎殺黒龍波」

飛影は、黒龍波を放った

ダビデは、全身の気合いと力で黒龍を飲み込んだ

飛影「な、なんだと。」

蔵馬は、妖狐の姿になった

蔵馬「許さん。」

しかし、妖狐の姿になっても、ダビデの力には勝てなかった

2人は、倒れた

桑原「てめえ、切り裂いてやる」

桑原の次元刀をなんと
折ってしまった

ダビデ「脆いね。」

幽助「なんてやろーだ」

その時、なんと、あの二匹の最強クラスの妖怪が現れた

黄泉と骸だ。

黄泉「久しぶりだな。浦飯。蔵馬大丈夫か」

蔵馬「黄泉か。奴は、強いぞ。」

骸「飛影、あとは、俺がやる。」

ダビデ「美味そうな匂いオマエラ、SS級妖怪だな。食い後妙あるな。」

骸「貴様は、殺すぞ」

骸と黄泉は、ダビデに襲い掛かった

第四章 倒されていく仲間達

ダビデ「めいおうかいしんげき冥王会心撃」

骸「なにっ」

黄泉「なんだと」

骸と黄泉に大ダメージを与えた

ダビデ「無駄だ、黄泉とやら、貴様の防御は、完璧だ完璧すぎる。S級クラスの妖怪では、何万年かけても破れぬ防御。しかし、相手が悪かったな。そして、骸とか、言ったな、貴様防御は、弱いな」

骸「知った口叩くんじゃねえ。はあーっ」

骸は、再び、ダビデに向かっていくが、歯が立たない。

そして、ダビデの周りの空間を切り裂いた

骸「逃げらんねえぜ」

ダビデ「ふん、はあっ。」

ダビデは、切り裂かれた空間を糸も簡単に通り抜けた

骸「なんだと」

幽助（骸と黄泉が赤ん坊扱い。俺に勝てるのかよ。）

そして、骸も黄泉も倒れた

ダビデ「いたたくとするか、腹も減ったし。」

幽助が、ダビデに向かっていったその時、

氷の剣が。

なんと、リンク、凍矢、酎、死々若丸、鈴木、陣が
助けにきた。

幽助「おめえら」

陣達は、ダビデに一斉にかかったが

やはり、ダビデの前には、6人になす術もなく倒れた。瀕死となった

ダビデ「今日は、まるで高級バイキングだな。こんなに、上級妖怪ばかり。」

飛影、蔵馬、桑原

黄泉、骸、陣たちは、完全に意識を失っていた。

ダビデの攻撃は

超強力なのだ

幽助「ちくしょー俺が、俺がやらなきゃ、誰がやるんだ。食らえ霊丸！ー！」

ダビデ「無駄だ、はあーっ」

ダビデは、再び気合いでかき消した。

ダビデ「もう終わりだ。死ね。冥王会心撃」

幽助「ちくしょー避けれねー」

その時どこからもなく

強力な霊気の玉が飛んできた。

幽助「なんだ。」

ダビデ「靈気だと。」

そう、幽助のほかにこれほどの靈気を操れる人間など

一人しかいない。

仙水「よう、久しぶりだな浦飯。」

幽助「仙水。仙水か。」

仙水「ああ。」

第五章 2人の霊界探偵の力

元霊界探偵仙水が
現れた

仙水は、幽助に、自分の死後を話した

いつきに、少しずつ、再生してもらい、いつきの術で数年冬眠して
記憶、肉体共に蘇ったことを

そして、魔界に出できた

仙水は、魔界の異様な変化を察知し、超強力な妖気が集まるこの場
所に来たと話した

仙水「さてと、浦飯、こいつを倒して、あの時果たせなかったリタ
ーンマッチをしよう」

幽助「ああ。もちろんだぜ。よかったよ仙水。おめえともう一度会
えて」

仙水「ふん。君は相変わらずだね。まあそれが君のいいところだ。さて、いこうか」

ダビデ「かなり霊力があるな。オールバックの小僧め」

仙水「俺は、小僧じゃない。仙水だ。いくぞ」

幽助「ああ」

幽助と仙水は、タッグを組

ダビデに挑んだ

やはり仙水は、強かった

聖光氣を身にまとい、

裂蹴紅球波^{れつしゅうきゅうは}を打ち込んだ

ダビデも、気合いでは
かき消せず

避けた

幽助は、肉弾戦に持ち込み

仙水は、靈氣のキャパシティーを

フル活用し

打ち続け幽助を援護した

ダビデ「貴様らやるな。ならば俺の最強の姿を見せてやるっ」

ダビデの妖氣が膨れ上がった

ダビデ「これが、俺の真の姿よ」

ダビデは、一瞬にして

仙水の背後に

そして、仙水の背中を貫いた

仙水「がはっ。な、なんだと」

幽助「仙水。おい」

仙水「だ、大丈夫だ。」

仙水は、大きなダメージを負ってしまった

幽助「ちくしょー。俺が、俺が、無力なはっかりに。二度も仙水は、殺させねえ。俺の命にかえてもな」

（よく言った息子）

その時、どこからともなく声が。

雷禅（おめえ、やっぱり俺の息子だ。ただこんな野郎にてこづるな。みっともねえ。いいか、力だ、力をやる）

幽助（親父。）

雷禅が幽助に入っていた

幽助「うわぁー」

ダビデ「な、なんだこの、妖気は、いや霊気か」

幽助「さあ、最終決戦始めようぜ」

最終章 決着そして帰還 ―フォーエバ幽遊白書―

幽助は、とてつもないオーラを放った

ダビデ「くっ。震えてるだと、まさかこの俺が」

幽助「うらぁー」

スピードは、幽助とダビデは、互角だったが、攻撃力は、幽助が圧倒していた

ダビデ「なんだと。この俺に傷を。」

幽助「てめえは、終わりだ」

ダビデ「舐めるな、冥王会心撃」

幽助は、冥王会心撃を弾いた

ダビデ「貴様。誰だ」

幽助「俺は、浦飯幽助だ。」

ダビデ「こうなったら、俺の最強奥義で貴様を殺してやる」

幽助「妖怪もホラがふけるのか」

ダビデ「消え失せろ、冥王デスブラックボール（死の暗黒玉）」

幽助「ふん。見せてやるよ。俺の、最強技、10倍霊丸!!」

ダビデ「な、なんだとぎゃあー」

幽助の放った10倍霊丸は、ダビデを完全に消滅させた

雷禪（やるじゃねえか息子。これからは、てめえでやれよ。おしめは、もう取り替えてやらねえぞ）

幽助（親父、ありがとうな。うっ）

幽助は、ついに冥王ダビデを倒した

そして、蔵馬が目を覚まし

全員に薬草を与えた。

黄泉「じゃあな。蔵馬」

骸「飛影また会うときまで。あばよ」

蔵馬「ああ。じゃあな」

飛影「ちっ。」

仙水「浦飯、決着は、またにしよう。俺は、この魔界で妖怪と暮らす。決着は、また、お前が魔界にきたら着けよう」

幽助「ちっ、もったい付けやがって」

こうして、陣たちはまた、元の場所へ

仙水は、去っていった

幽助「さて帰るか」

丁度特防隊が穴をつなげた

飛影「じゃあな。」

幽助「たっしやでな。」

こうして

幽助達は、霊界へ

コエンマに感謝されて

人間界に3人は、戻った

幽助「ああーっ、クタクタだぜ。」

蔵馬「そうだな」

桑原「はああ、寝たいぜ」

あれから更に一年の月日が流れた

高校3年になった

幽助

桑原

蔵馬は、普通な平凡な日々を過ごしていた

幽助は、卒業と同時に

蛭子と結婚が決まり

蔵馬は、大学に進学した

桑原は、大好きな雪菜に
アタックし続けていた

叶うと信じて

こうして

幽助の霊界探偵最後の仕事は、終わった

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4285o/>

幽遊白書NEXT

2010年10月31日14時42分発行